

中寺廃寺跡

平成17年度



2006年3月

琴南町教育委員会



A)B地区第1テラスより大川山を望む(北西より)



B)B地区第2テラスより完掘状況(北東より)



C)第2テラス 多口瓶出土状況



D)第2テラス出土 越州窯系青磁碗

図版2



A)『西村家文書』「絵図(『殿様御鷹野被仰出候ニ付峯筋御往来道法方角絵図指出之控』)」



B)『西村家文書』「絵図(琴南町柞野谷付近)」

序 文

平成 17 年度における中寺廃寺跡発掘調査が事故も無く、予想を超える成果を収めて無事終了し、ここに第 2 年次の調査報告書を刊行できることを心から喜びますとともに、さまざまな形で発掘調査にご協力、ご支援を頂いた皆様に衷心より厚くお礼を申し上げます。

本年度は、昨年度発掘調査を行ないました A 地区から、東へ少し離れた B 地区を調査地域と定め、遺構、遺物の発見に努めました。お陰をもちまして、多くの礎石、柱穴、土器片等を発見することができました。なかでも、形の異なる西播磨地方産の二種の多口瓶の出土と、小さいけれど、中国浙江省越州窯において产出された 9 世紀末の青磁碗片の出土は、標高 700 メートル余、険阻な山中のこの地の往時をしのぶ縁として、大きく、しかも、深い意味合いがあるのではないかろうかと思っております。あらためて、今後さらに歴史の真実と深奥を求めて、調査を進めなければという思いを強くしております。

本年度も、香川県教育委員会文化行政課のご支援の下、発掘調査を進めてまいりましたが、昨年度に引き続き調査指導ということで、中寺廃寺跡調査・整備委員会委員並びにオブザーバーの皆様には公私ともご多忙な中、いくどかの現地視察や委員会にご出席下さり、貴重なご指導を賜り誠に有難うございました。記してお礼に代えさせていただきますとともに、今後の発掘調査、遺跡整備に引き続き変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げます。

終わりになりましたが、本報告書が、考古学をはじめ、歴史、文化、民俗等々幅広い関係の皆様のご关心に、いささかなりとも資するところがあれば、これに過ぎる幸甚はございません。今後ともよろしくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、発刊のご挨拶に代えさせていただきます。

平成 18 年 3 月

琴南町教育委員会

教育長 三好和榮

例　　言

1. 本書は、琴南町教育委員会が文化庁と香川県の文化財補助金を受けて平成 17 年度国庫補助事業として実施した、琴南町内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、香川県仲多度郡琴南町造田 3469 - 2 他に所在する中寺廃寺跡を対象とした。
3. 発掘調査は琴南町教育委員会中寺廃寺跡発掘調査室が行い、同主事加納裕之が担当し、同臨時職員中村文枝がこれを補助した。
4. 遺構・遺物実測は加納・中村が行った。遺構・遺物の写真撮影、報告書の執筆・編集は加納が行った。遺構・遺物の浄書、図面のレイアウトは中村が行った。
5. 本書の実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。また図中の方位・座標は国土座標第IV系（世界測地系）による。標高はT.P.（東京湾平均海面）からのプラス値である。座標・標高の記載はすべてm単位である。
6. 出土遺物・写真・図面等の調査成果物は琴南町教育委員会にて保管している。
7. 挿図の一部に国土地理院発行 5 千分の 1 国土基本図を複製した琴南町全図（承認番号四複第 238 号）及び、国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「内田」を一部改変して使用した。
8. 遺構は下記の略号によって表示している。
SB 堀立柱建物跡 SP 柱穴 SK 土坑 SD 構状遺構
9. 調査の実施から本書の執筆に至るまでは、以下の方々や諸機関のご指導・ご協力を頂きました。記してお礼に代えさせていただきます。
伊賀正法・上原真人・大久保徹也・岡田康博・尾野善裕・片桐孝浩・木原溥幸・菅原良弘・高木敬子・翼淳一郎・中島恒次郎・丹羽祐一・信里芳紀・藤好史郎・森内秀造・山下平重・山元敏裕・山本秀夫・渡部明夫・香川県埋蔵文化財調査センター・香川県立文書館・香川県歴史博物館・京都国立博物館・奈良文化財研究所・琴南町文化財保護協会・称名寺・長善寺・豊楽寺・妙覚寺（敬称略・五十音順）

目 次

1. 遺跡の環境	(1)
(1) 遺跡の立地 (2) 歴史的環境	
2. 調査の経過	(4)
(1) 調査の経緯 (2) 中寺廃寺跡調査・整備組織 (3) 調査の経過	
3. 遺構	(6)
(1) 概要	
(2) 第1テラス	
①土壤の造成 ②礎石建物跡 ③広場状遺構	
(3) 第2テラス	
①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡 SB01 ③掘立柱建物跡 SB02 ④掘立柱建物跡 SB03	
(4) 第3テラス	
①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡 SB04	
4. 遺物	(18)
(1) 概要 (2) 第1テラス (3) 第2・3テラス間斜面 (4) 第2テラス	
(5) 第3テラス (6) 金属遺物	
5. 文献調査	(24)
(1) 概要	
(2) 『西村家文書』「日帳」所収 殿様鷹野関連史料	
(3) 『西村家文書』「絵図」(『殿様御鷹野被仰出候ニ付峯筋御往来道法方角絵図指出之控』)	
6.まとめ	(31)
(1) B地区所在建物の検討 (2) 中寺廃寺跡出土多口瓶について	
(3) 中寺廃寺跡の全体像について	

挿 図 目 次

第1図 中寺廃寺跡位置図	第7図 多口瓶出土状況平・断面図
第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図	第8図 第2テラス断面図
第3図 B地区第1～3テラス平・断面図	第9図 第3テラス平・断面図
第4図 第1テラス平・断面図	第10図 B地区出土遺物実測図 その1
第5図 第1テラス断面図	第11図 B地区出土遺物実測図 その2
第6図 第2テラス平面図	

表 目 次

- 第1表 香川県内古代山岳寺院関係遺跡
第2表 中寺廃寺跡出土遺物観察表（1）土器
第3表 中寺廃寺跡出土遺物観察表（2）金属遺物

写真図版目次

- 図版1. A) B地区第1テラスより大川山を望む（北西より）
B) B地区第2テラス完掘状況（北東より） C) 第2テラス多口瓶出土状況
D) 第2テラス出土 越州窯系青磁碗
- 図版2. A)『西村家文書』「絵図（『殿様御鷹野被仰出候二付峯筋御往来道法方角絵図指出之控』）」
B)『西村家文書』「絵図（琴南町柞野谷付近）」
- 図版3. A) 中寺廃寺跡・満濃池遠景（南東より） B) 平成17年度調査区遠景（南より）
C) 第1テラス調査着手前状況（北東より） D) 第3テラス調査着手前状況（北東より）
E) 第2テラス調査着手前状況（東より）
- 図版4. A) 磐石建物跡完掘状況（北東より） B) 土壇北西隅石列（北西より）
C) 建物東辺中央部階段石材散布状況（東より） D) 建物中央の磐石（北西より）
E) 北東隅石掘り方断面（西より）
- 図版5. A) 広場より大川山を望む（北西より） B) E～E' 断面（北東より）
C) B～B' 断面（北西より） D) A～A' 断面（東より） E) C～C' 断面（西より）
- 図版6. A) エリアA完掘状況（南より） B) エリアB遺構検出状況（南より）
C) エリアA f～f' 左:SD02 右:SD01（北東より）
D) エリアA SP06 (SB01を構成) 断面（南東より）
E) エリアA SP08 (SB02を構成) 断面(南東より)
- 図版7. A) SP03断面(SB03構成)（南より） B) SP12遺物出土状況（東より）
C) SP16・SK02断面（北より） D) SP16・SK02 多口瓶出土状況（東より）
E) 遺構検出状況（南より）
- 図版8. A) B地区第2テラス SP16・SK02他出土多口瓶
B) 第2テラス SD02出土越州窯系青磁碗 C) 第2テラス SP12出土須恵器壺
D) 第2テラス盛土直上出土須恵器壺
- 図版9. A) B地区第1テラス出土遺物（内面） B) B地区第1テラス出土遺物（外面）
- 図版10. A) B地区第2・第3テラス出土遺物（内面）
B) B地区第2・第3テラス出土遺物（外面）
- 図版11. A) B地区第3テラス・第2～3テラス間斜面出土遺物（内面）
B) B地区第3テラス・第2～3テラス間斜面出土遺物（外面）
- 図版12. A) B地区出土金属遺物 B) B地区出土金属遺物X線透過写真

1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の立地

本町は香川県の中央部南端に位置し、徳島県境の讃岐山脈に抱かれた複雑急峻な地形であり、土器川が町の中央を南北に貫き讃岐平野を経て瀬戸内海に注いでいる。土器川沿いの盆地の他は、山間部の平坦地を含む山岳地帯と峡谷からなる。本町は金毘羅街道の一つである阿波街道の国境の村として通婚圏・商業圏などにおいて徳島県との関係が深い地域である。

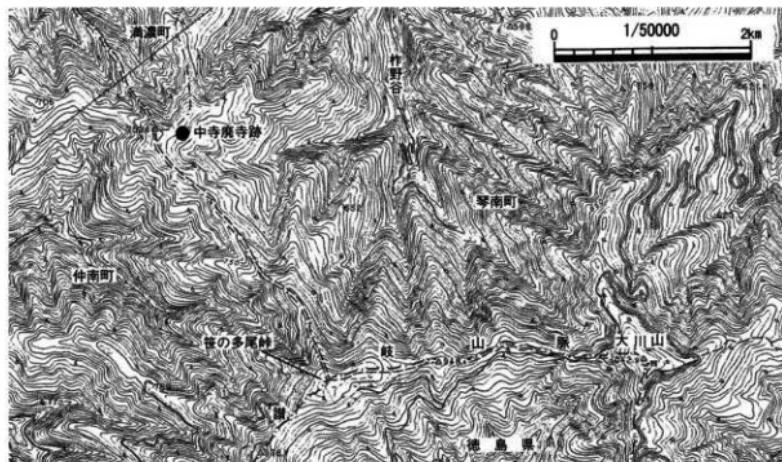
中寺廃寺跡は大川山（1,043m）から西へと続く讃岐山脈から北西へ分岐した一支脈の先端付近に所在する。遺跡の北・西側を主尾根で囲まれ、東側には小支尾根が南西に突出し、大川山山頂が位置する南東側に開けた谷の懷に位置する。遺跡が位置する谷の懷は緩斜面であるが、懷の外は急斜面となる。付近の尾根上には現在の行政区画である仲多度郡の琴南町・仲南町・満濃町が接し、そこからは日本最大のため池である満濃池を一望できる。また、中寺廃寺跡付近は徳島県と琴南町柞野・仲南町塩入・満濃町江畑をつなぐ尾根沿いの道が昭和時代まで利用されていた。

(2) 歴史的環境

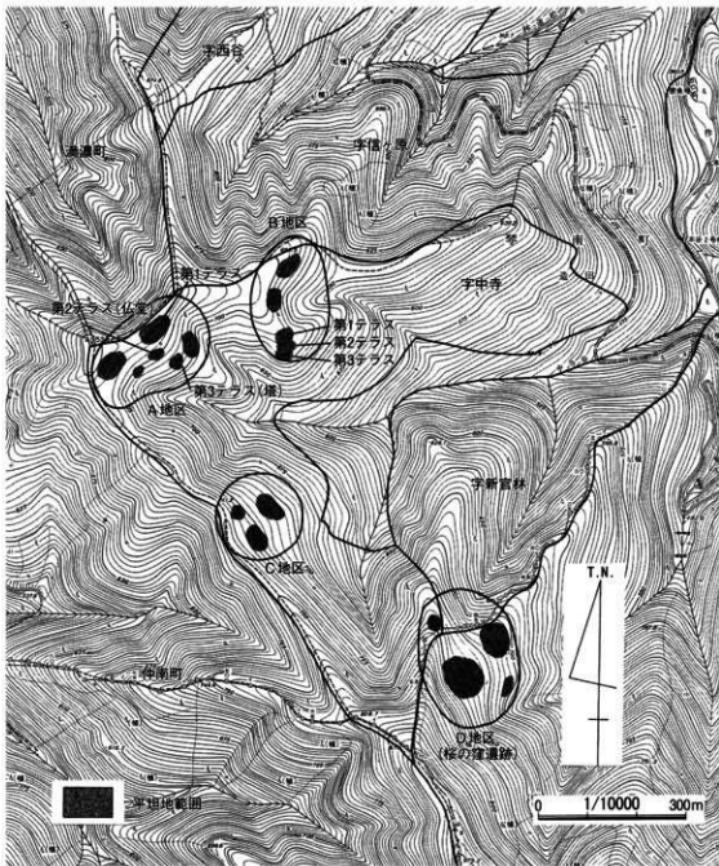
琴南町内の遺跡については前年度報告書に譲り、香川県内に所在する古代山岳寺院関係の遺跡について述べる。発掘調査が行われた古代山岳寺院としては高松市千間堂跡がある。また、現在の根来寺付近の高松市中山庵寺や、讃岐国分寺付近の坂出市横山庵寺において平安時代の瓦が採集されており、山岳寺院の存在が示唆されている。また中世に属する山岳寺院であるが仲南町尾ノ背庵寺は中寺廃寺跡の近隣に所在することから、中寺廃寺跡との関係が深いと考えられる。

番号	遺跡名	主要遺構	主要遺物	時期	所在地	標高
1	中寺廃寺跡	掘立柱建物跡・塔跡・礎石建物跡・基壇	西播磨須恵器多口瓶・越州窯系青磁碗・須恵器・土師器・黒色土器碗・鉄釘	9C中葉～12C	仲多度郡琴南町造田字中寺	670～730m
2	尾ノ背庵寺跡 ※中世寺院	礎石建物跡・列石・石垣・集石遺構	白磁四耳壺・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・巴文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦・平瓦・丸瓦・須恵器・土師器・青磁碗・鉄釘	12～16C	仲多度郡仲南町大字七箇字に尾	470～520m
3	千間堂跡	礎石建物跡・掘立柱建物跡・集石遺構・基壇	須恵器多口瓶・灰釉陶器・綠釉陶器・平瓦	9C後半～12C末	高松市屋島西町北嶺山上	285m
4	中山庵寺	礎石建物跡	七葉单弁蓮華文軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鉄釘	9～10C	高松市中山町東嶽	355m
5	横山庵寺	石室・基壇跡？・井戸跡	巴文軒丸瓦・巴文軒平瓦・均整唐草文軒丸瓦・連珠文軒平瓦・丸瓦・平瓦・綠釉陶器・須恵器・土師器	平安末～室町時代	坂出市府中町横山・丸龜市富熊大原北	242m

第1表 香川県内古代山岳寺院関係遺跡



第1図 中寺廃寺跡位置図



第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図



中寺廃寺跡平坦地分布状況

2. 調査の経過

(1) 調査の経緯（第1・2図参照）

調査地付近は、「中寺」「信が原」「鐘が崖」「松地谷」という寺院関係の地名が所在すること、寛政11年(1799)に記された『讃岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、大川七坊といわれる寺院が山中に所在したと近隣集落において伝承されることより、寺院の存在を示唆されていた。しかし寺院の詳細が記された文献は未確認であり、中寺廃寺跡は長らく幻の寺院であった。

昭和56年に中寺廃寺跡付近の分布調査を実施し、現在のA地区付近において数箇所の平坦地を発見した。統いて昭和59年にはボーリング棒による調査を実施し、第2テラスで礎石を確認した。また第3テラスにおいては試掘調査により塔跡を確認した。塔心礎石の下部から地鎮・鎮壇具と想定される10世紀前半の遺物が出土し、10世紀前半に塔が建立されたことを確認した。平成15年度には字中寺全域の詳細分布調査を行い、約1,000mの範囲に遺跡が展開していることが判明した。また、遺跡は大きく4つの地区に分けることが可能であり、A～D地区とした。平成16年度には中寺廃寺跡調査・整備委員会を組織し、長期計画に基づき本格的な調査を開始した。A地区において塔跡・仏堂跡の発掘調査を実施し、A地区は10～11世紀における中寺廃寺跡の中心的な地区であることを確認した。また、文献調査の成果により19世紀前半には寺がすでに名称不明の状態であり、現在のD地区の位置に寺跡があると伝承されていたことを確認した。

(2) 中寺廃寺跡調査・整備組織

調査指導 中寺廃寺跡調査・整備委員会

委 員	上原 真人	(考古学 京都大学大学院教授)
	丹羽 祐一	(考古学 香川大学教授)
	木原 博幸	(文献史学 徳島文理大学教授)
	伊賀 正法	(琴南町文化財保護審議会 会長)
	菅原 良弘	(琴南町文化財保護協会 会長)
	佐野 利昭	(琴南町 町長)
	三好 和榮	(琴南町教育委員会 教育長)
オブザーバー	山下 平重	(香川県教育委員会文化行政課 主任)

調査担当 琴南町教育委員会

總 括	雨露 弘	(琴南町教育委員会 主幹)
調査担当者	加納 裕之	(琴南町教育委員会 主事)
調査補助員	中村 文枝	(琴南町教育委員会 臨時職員)

(3) 調査の経過

平成17年度は中寺廃寺跡B地区において測量調査・発掘調査を実施した。夏から秋にかけて現地作業と並行して文献調査を実施し、冬季は報告書作成期間とした。5月中旬より調査準備を行い、5月下旬よりB地区各テラスの平板測量を実施し、6月下旬からB地区全体の地形測量を業者に委託した。6月上旬よりB地区第1テラスの発掘調査に着手し、9月中旬より第2・第3テラスの発掘調査に着手した。調査終了後に調査区の埋め戻しを行い、12月3日に終了した。その後第3回調査・整備委員会を12月21日に実施し、今年度調査成果の報告と、今後の調査・整備方針について協議した。整理作業は遺物・図面の基礎整理作業を発掘調査と平行して進め、発掘調査終了後に報告書掲載図面の整理・浄書を行い、2月から3月にかけて報告書印刷を業者へ委託した。また、発掘調査の他に中寺廃寺跡関連では以下の視察・見学を受け、事業を開催した。

平成17年4月22日～6月2日 琴南町役場ロビーにて「平成16年度調査速報展」を開催

- 5月20日 文化庁文化財調査官岡田康博氏・香川県文化行政課主任山下平重氏視察
- 7月8日 琴南町・仲南町・満濃町の教育長・職員視察 15名
- 7月19日 琴南町文化財保護協会総会「中寺廃寺跡の調査成果について」講演 45名
- 8月12日 琴平町子ども夏休み講座「ふるさと探検」見学 4名
- 8月17日 調査・整備委員会原真人委員・丹羽祐一委員視察
- 10月10日 平成17年度現地説明会 120名
- 10月18日 仲南町成人講座見学 20名
- 11月5・6日 琴南町民文化祭にて「平成17年度調査速報展」を開催
- 通年 「琴南ふるさと資料館」にて調査成果を展示。町内外の小学生などが来館



第3回 調査・整備委員会



3町教育長・職員視察



現地説明会



琴平小学生体験講座



仲南町成人講座



資料館での展示

3. 遺構

(1) 概要（第3図参照）

今年度の発掘調査はB地区の第1～3テラスを対象とした。B地区は中寺廃寺跡北東部において確認した地区で、5箇所の平坦地により構成される。今年度調査を行った第1～3テラスは南東方向へ突出した小支尾根の先端付近に位置する。第1～3テラスは周囲を勾配の強い斜面により囲まれているが、第1テラスの北東・北西側には緩斜面の尾根が続いている。

発掘調査の結果、第1テラスにおいて礎石建物跡1棟とそれに伴なう広場状遺構、第2テラスにおいて掘立柱建物跡3棟と溝2条、第3テラスにおいて掘立柱建物跡を1棟確認した。

第1・2テラス間の比高差は約3m、第2・3テラス間の比高差は約5mである。

(2) 第1テラス

第1テラスは南東方向へ突出した尾根先端の鞍部に位置する300m²程度の平坦地である。平坦地の標高は68.9m前後であり、第2・3テラスよりも高所に位置する。平板測量の段階で土壌・礎石・土壌東側に隣接した平坦地を確認していた。今年度は土壌全体の4分の3を発掘調査した。4分の1については腐植土を除去した段階で礎石の配置を確認できたため、追加の掘削は行わずそのまま埋め戻しを行った。また、土壌範囲中の腐食土直下にて小礫が多く検出されていたため、土壌の上面は礫によって葺かれていた可能性が考えられる。

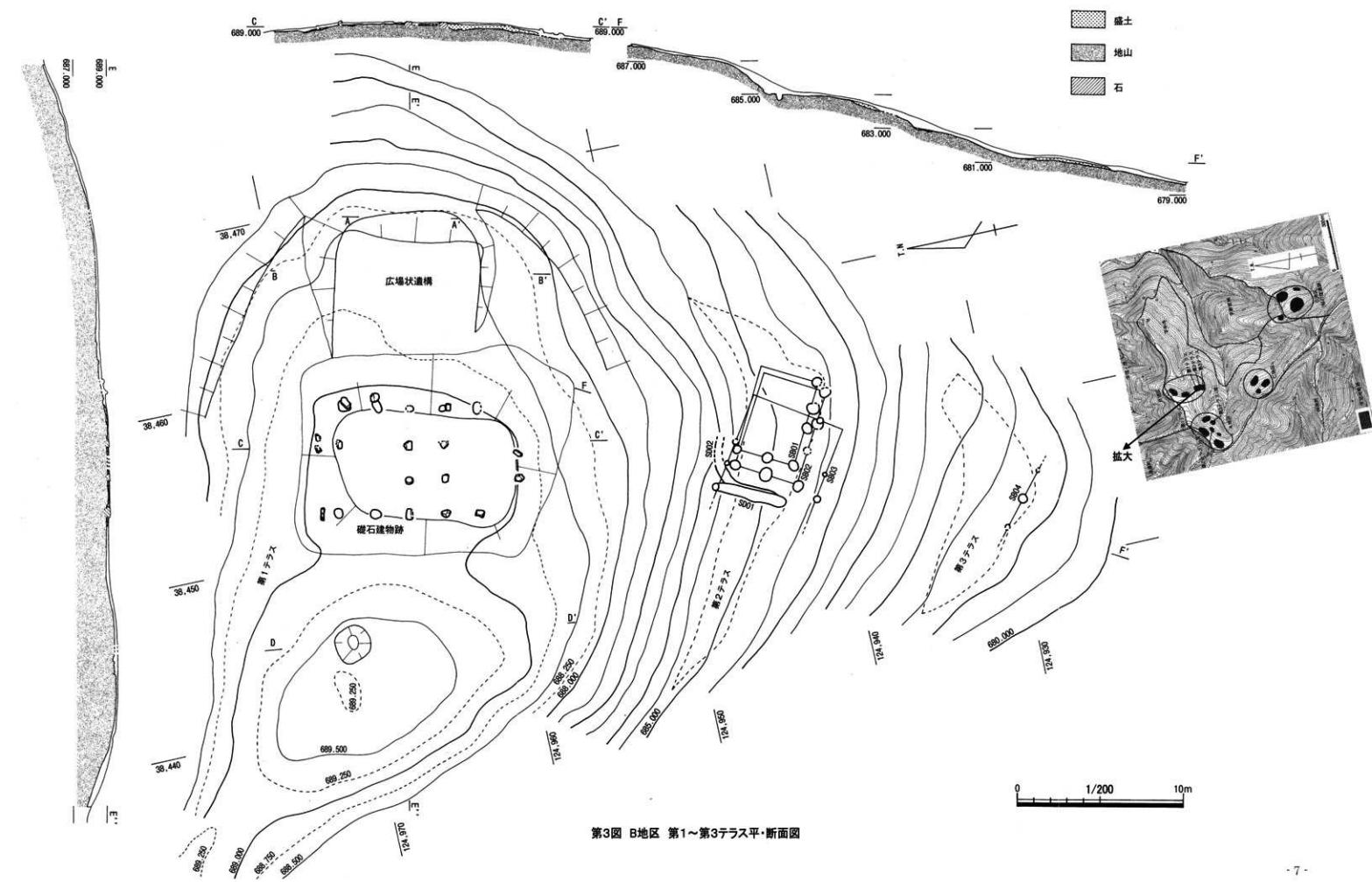
調査の結果、土壌を伴う桁行5間×梁行3間の礎石建物跡を1棟確認した。また、土壌の東側に隣接して広場状の遺構を確認した。土壌の西外側についても平面的に遺構検出を試みたが、遺構は確認できなかった。

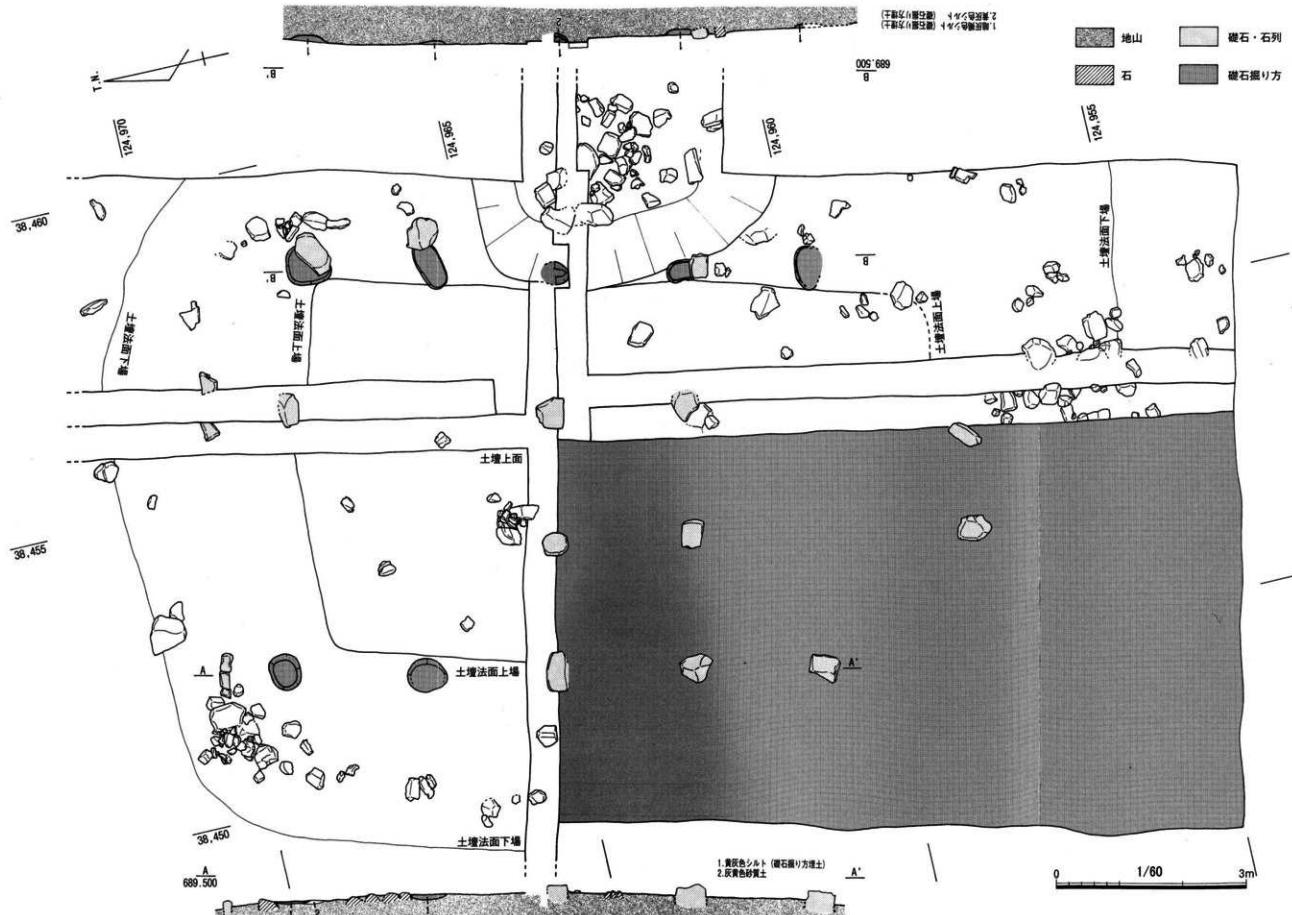
①土壌の造成（第5図参照）

第1テラスの土壌は尾根先端の鞍部の緩やかな平坦地を岩盤まで掘削し、周囲に盛土して造成している。特に尾根の主軸線からみ出す土壌の南半分は地山を岩盤まで掘削し、統いて土質の違う薄い土を交互に盛り約30cmの厚い盛土により平坦面を造成している（C-C'断面参照）。

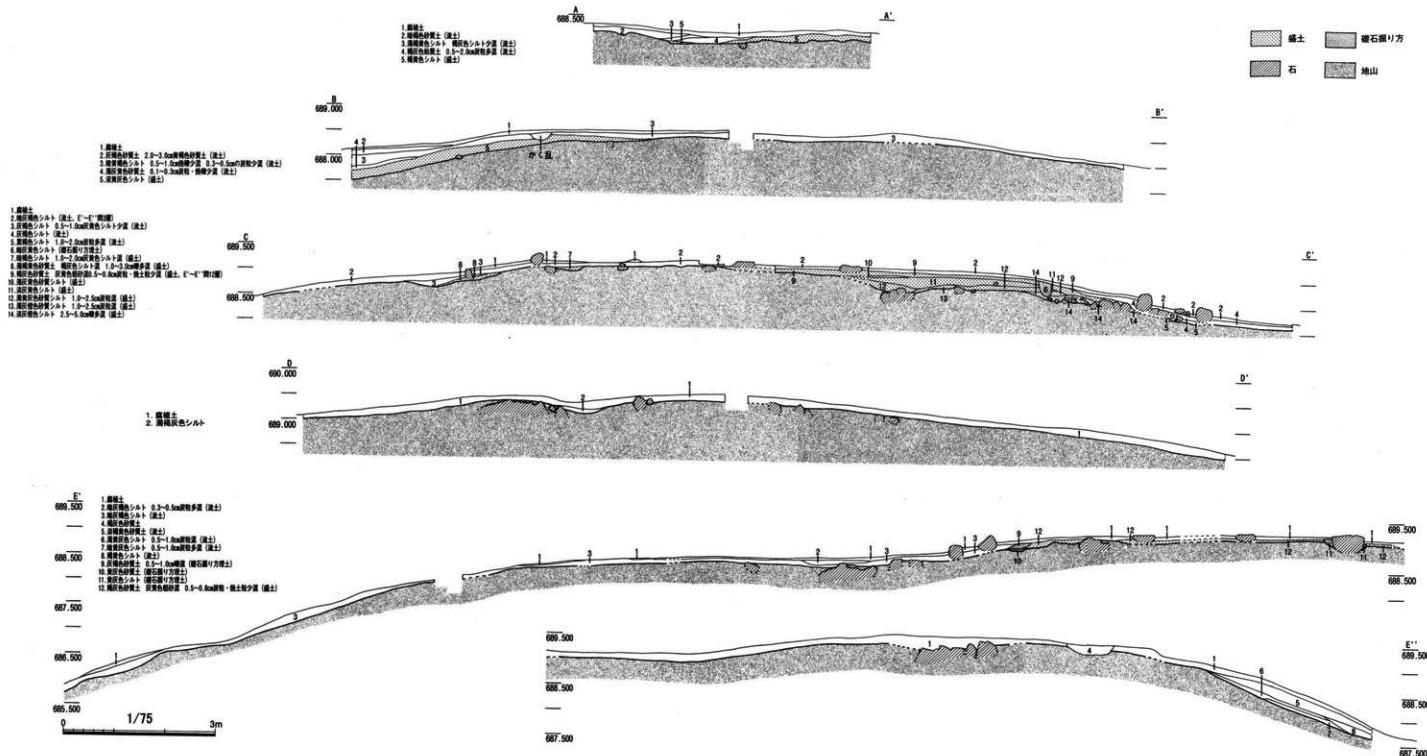
土壌上面の幅は南北方向が約9.5m、東西方向が約5.9mで、平坦地面積は約56m²である。土壌の上面より外側へ礎石がみ出す状態で検出されているため、土壌は長年の侵食のため、本来の土壌上面より狭くなっていると考えられる。

土壌周囲の法面は南・北側が幅約2m高低差約0.5m、東側が幅約3.5m高低差約0.5m、西側が幅約3m、高低差約0.3mである。土壌南・北側法面の外側が約1mの平坦地により囲まれ、さらに外側が自然地形となる。土壌西側法面の外側は尾根へと続く幅約3m高低差約0.5mの高まりとなる。





第4図 第1テラス平・断面図



第5図 第1テラス断面図

土壇北東隅の法面において礎石列と平行する石列を確認している。また土壇北辺中央の法面においても若干方向がずれるものの石列を確認しており、このような石列が土壇の補強のため周囲に巡らされていたと考えられる。

②礎石建物跡（第4・5図参照）

礎石は土壇上面の端部に沿い8個確認した。礎石が転落した部分では、礎石を据えた掘り方を確認している。また、土壇周囲において転落したと思われる礎石を確認しており、桁行5間×梁行3間の礎石が設置されていたと考えられる。土壇中央には若干小ぶりな礎石が4個、1間×1間で並ぶ。土壇上面端部の礎石は大小様々な形状をなすが、土壇中央の4個はほぼ大きさがそろい、西側2個が隅丸正方形を呈する。礎石の石材はいずれも和泉砂岩である。発掘調査地の北東約100mにおいて礎石と同質の石が露出しており、礎石の石材は周囲の自然石を調達したと考えられる。

また、土壇東側中央部流土中より板状や角柱状など様々な形状をなす石の集石と土壇の窪みを確認した。集石は建物内部へと上がるための階段を構成していた石材、土壇の窪みは石を据え付けた掘り方であると考えられる。

礎石建物跡の幅は桁行約10.0m、梁行約6.3mで、床面積は約63m²である。桁行における各礎石の間隔は約2.1m、梁行における各礎石の間隔は約2.0mである。また、建物中央の4個の礎石は約2.1m間隔で並んでおり、外側の礎石列とは東西軸が若干ずれる。建物の方位は桁行方向の礎石列でN-12°-Wである。また、建物の東側には大川山山頂が位置する。

各礎石について中央部の最小幅を計測すると、外側礎石列のうち四隅の礎石が約35cm、四隅を除く礎石が約25cm、建物中央の4個の礎石が約30cmであるため、柱の規模は建物の四隅の柱が直径35cm以下、建物の四隅を除く外側の柱が25cm以下、建物中央の柱が直径約30cm以下であったと考えられる。断面図及び現地での観察によると外側礎石列の各礎石は幅が厚く、削平された岩盤上や盛土上に掘り方を伴なって据えられている。それに対して建物中央の4個の礎石は幅が薄く盛土上面に直に据えられている。

③広場状遺構（第3・5図参照）

広場状遺構は南北幅約9.0m、東西幅約6.0mで、約54m²の平坦地である。平坦面の平面形は平坦地東側中央部が若干窪む方形を呈し、方位は西側に隣接する礎石建物跡と合致する。

断面図によると広場状遺構は中央から南側が地山掘削、東側が若干の盛土により造成されていることが断面図より見て取れる（B-B'断面参照）。

また、広場状遺構東側中央部から低所の幅約1m30cmの平坦地へと下る幅90cmのスロープを確認した（A-A'断面・E'-E''断面）。低所の平坦地は地表面の観察によると、北東へ向かう

緩斜面の尾根まで続いている。尾根は前述の通り琴南町柞野谷へと下る山道と連結しているため、麓からの上り口と建物の間をつなぐ道であったと考えられる。

(3) 第2テラス

第2テラスは標高 686m前後に位置する約60m²の南面する平坦地である。山側の第1テラスと谷側の第3テラスの中間に位置する。調査着手前の現況地形測量の段階で土壌らしき地形を確認していた。今年度はまず第1～3テラスを縦断するトレンチを設定し、平坦地の範囲・堆積状況を確認した後、調査区の拡張を行い地山・盛土直上面において遺構検出を試みた。エリアAにおいては遺構を完掘し、エリアBにおいては遺構検出状況の記録を行った。また、エリアBの柱穴については、検出面における遺構埋土上面の土質がエリアAの柱穴列と近似するものについて掘立柱建物跡を構成する柱穴とした。

調査の結果、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡2棟(SB01・SB02)、桁行4間以上×梁行4間の掘立柱建物跡1棟(SB03)、溝状遺構2条(SD01・SD02)を確認した。遺構面の大部分が焼土・炭片が多く混じる焼土層(第8図k-k'間断面図12・13層)で被覆されており、SB01・SB02は焼土層の下層より検出し、SB03は焼土層を切り込む状態で検出した。また、各建物跡と関係しない柱穴を数基確認しており、先行・後出する遺構の存在が示唆される。

①平坦地の造成(第8図参照)

第2テラスは山側の地山を岩盤まで掘削し、谷側は数段階に盛土を積み上げ平坦地を造成している。平坦地は発掘範囲外においても北西方向へ延びているため、他の建物が存在する可能性が考えられる(第3図点線参照)。

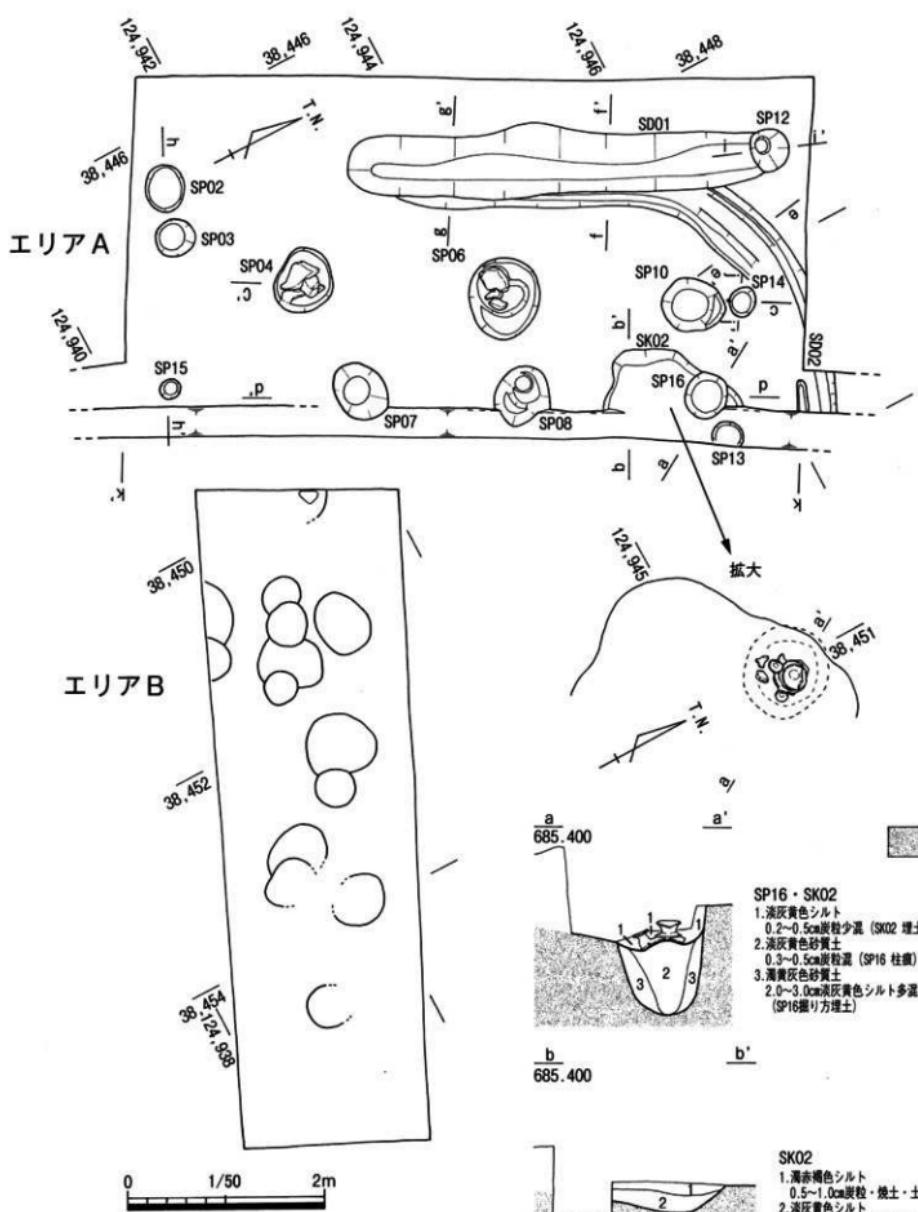
平坦地周辺の斜面勾配は山側自然地形が15°、山側法面が35°、谷側法面が47°である。谷側法面の角度により当時の平坦地はもっと広かったと考えられ(第8図点線参照)、第2テラスを造成していた盛土の多くは流失したものと考えられる。

また、第2テラス盛土の下方で幅約1mの狭い平坦地を確認した。各テラスを連絡する道の可能性が考えられるが、地表面では平坦地を観察できないためどこに連絡するのか不確定である。

②掘立柱建物跡 SB01(第6～8図参照)

遺構検出面において、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。建物の方位は梁行方向の柱穴列でN-28°-Eである。建物の幅は桁行約5.2m、梁行約3.6mであり、床面積は約19m²である。桁行における各柱穴の間隔は不揃いであるが、梁行における各柱穴の間隔は約1.8mで統一される。

柱穴の掘り方が盛土を切り込むため、盛土造成後に掘立柱建物が構築されたことが確認できる。



第6図 第2テラス平面図



第7図 多口瓶出土状況平・断面図

SP16・SK02

1. 淡灰褐色シルト
0.2~0.5cm炭粒少混 (SK02 埋土)
2. 淡灰褐色砂質土
0.3~0.5cm炭粒混 (SP16 柱底)
3. 淡黄褐色砂質土
2.0~3.0cm淡灰褐色シルト多混
(SP16埋り方堆土)

柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から柱の直径は約10cmと想定できる。また、SP16は柱抜き取り後に周囲に土坑SK02を掘削しており、建物廃絶直後に地鎮・鎮壇行為が行われた際、柱痕の真上に多口瓶を埋納したと考えられる（第7図参照）。また、SD02より出土した多口瓶が、SK02出土の多口瓶と接合するため、SD02は掘立柱建物跡SB01に伴う遺構であると考えられる。SD02は位置・形状より山側斜面より平坦地に流入する雨水を建物の外側へ流す排水溝と考えられる。

③掘立柱建物 SB02（第6・8図参照）

遺構検出面において、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。建物の方位は梁行方向の柱穴列でN-28°-Eである。建物の幅は桁行約6.0m、梁行約4.0mであり、床面積は約24m²である。桁行における各柱穴の間隔は中央の1間のみ約1.6mで、他は約2.2mである。それに対し、梁行における各柱穴の間隔はすべて約2.0mである。

柱穴の掘り方が盛土を切り込むため、盛土造成後に掘立柱建物が構築されたことが確認できる。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。またSP04・SP06には根石が設置されている。

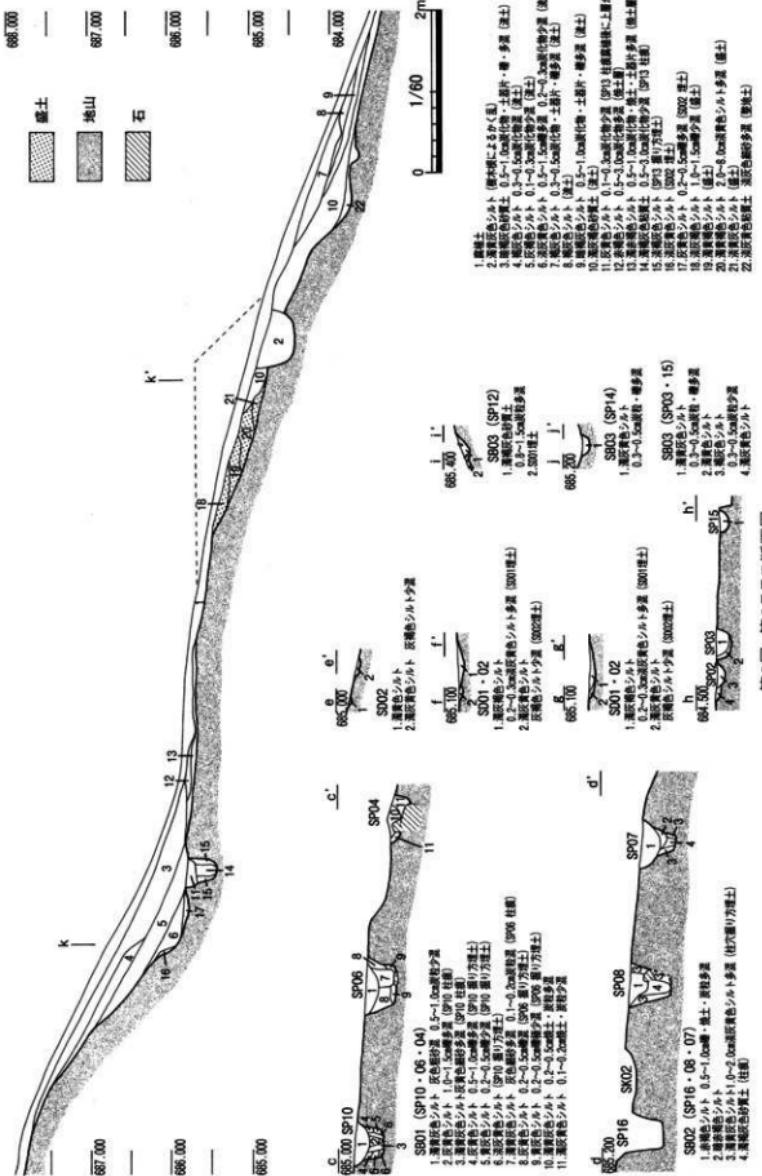
また、柱穴列西側にあるSD01は掘立柱建物跡SB01に伴うSD02を切ることから、SB02に伴う遺構である可能性が考えられる。（第8図 f-f'・g-g'断面参照）。SD01はSB02梁行方向に平行しており、柱穴の中心から溝の最深部までの幅は約1.3mである。SD01は位置・形状よりSB02の雨落溝であると考えられる。

④掘立柱建物 SB03（第6・8図参照）

遺構検出面において、桁行4間以上×梁行4間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を6基検出した。SB03を構成する柱穴は焼土層を切り込む状態で検出しており、また柱穴がSK02・SB02・SD01を切り込むことから、他の遺構に比べて最も新しい時期の建物跡と考えられる。柱穴の方位は桁行方向の柱穴列でN-57°-Wである。建物の幅は梁行約5.7mで、桁行は約6.0m以上と考えられる。桁行における各柱穴の間隔は約1.9m、梁行における各柱穴の間隔は約1.5mである。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。またテラス付近の測量図によるとテラスは調査区外において北東方向へ延びており、他の柱穴の間隔から建物の桁行は7・8間以内であったと考えられる（第3図参照）。

（4）第3テラス

第3テラスは標高681m前後に位置する約40m²の南面する平坦地で、第1・2テラスより低所に位置する。今年度はまず第1～3テラスを縦断するトレンチを設定し平坦地の範囲・堆積状況



第8図 第2テラス面断面図

を確認した後、調査区の拡張を行い盛土直上面において遺構検出を試みた。しかし、表土からの植物根によるかく乱が激しく遺構の検出が困難な状態であったため、盛土を掘削し地山上面まで掘削した状態で遺構検出を試み、遺構検出状況の記録を行った。調査の結果掘立柱建物跡を1棟確認した（SB04）。他にも溝状遺構と柱穴数基を確認している。

①平坦地の造成（第9図参照）

第3テラスは、山側は地山を岩盤まで掘削し、谷側は盛土を積み上げて平坦地を造成している。盛土は谷側より数段階に分けて構築していたようだが、盛土の大半が流出している。平坦地周辺の斜面勾配は山側法面が 24° 、谷側盛土法面（3層と6層の境）が 41° 、谷側地山法面が 14° である。谷側盛土法面の角度により当時の平坦地はもっと広かつたと考えられる。

②掘立柱建物 SB04（第9図参照）

遺構検出面において、2間以上の掘立柱建物跡を構成する柱穴 SP01・02・03を検出した。各柱穴の検出面における遺構埋土上面の土質はほぼ同質であった。柱穴列の方位はN-43°-Wである。検出できた建物の幅は約4.0mであった。各柱穴の間隔は約2.0mであった。柱痕を確認できる柱穴があり、柱痕の幅から建物を支えた柱の直径は約20cmと想定できる。またテラス付近の測量図によるとテラスは北東・南西方向へ延びており、他の柱穴の間隔から建物の桁行は4・5間以内であったと考えられる（第3図参照）。

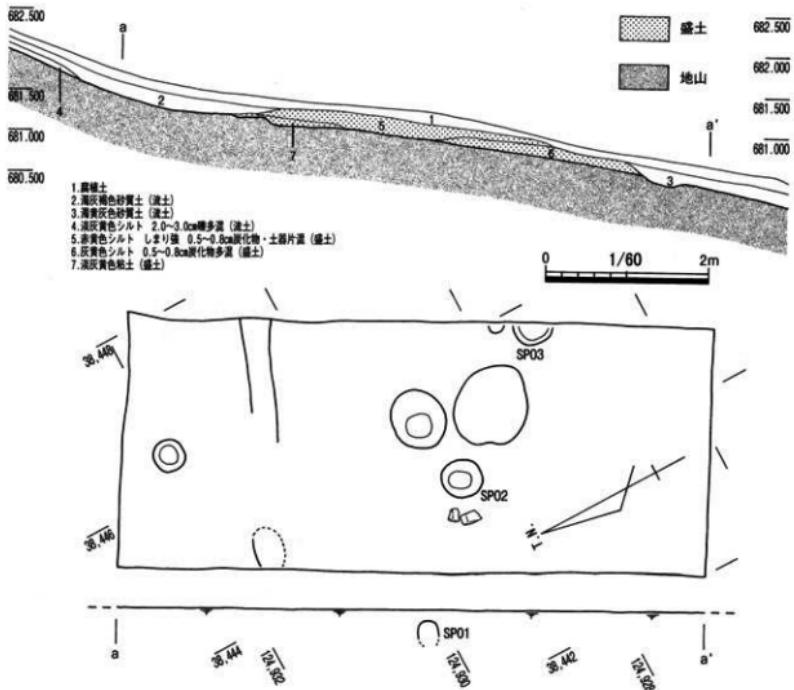
4. 遺物

（1）概要

今年度発掘調査において280コンテナに換算して約5箱分の遺物が出土した。遺物の種類は須恵器・土師器・土師質土器・黒色土器・越州窯系青磁・鉄製品・銅製品等で、時期は8世紀中葉～12世紀である。金属遺物についてはX線透過写真を図版12に掲載した。また、過去の発掘調査同様瓦は出土しなかった。遺物図面に関しては、須恵器・土師器の器形・製作技法に共通する要素が多い時期であることを考慮し、須恵器・土師器を一括して掲載している。

（2）第1テラス出土遺物（第10図参照）

第1テラスからは須恵器・土師器・黒色土器・金属遺物などが出土した。遺物は盛土・地山直上～流土下位において多く出土しているが、発掘対象面積に比べて遺物量は少なく、相当量の遺物が下方の谷側へ転落しているものと考えられる。1～5は土壌の盛土中より出土した。6～



第9図 第3テラス平・断面図

25は地山・盛土直上～流水土中より出土した。

1は須恵器壺蓋である。上面が平たく口縁端部は内面にゆるいナデを施す。2・3は土師器杯である。底部から体部にかけてやや外反しつシャープに立ち上がる。4は黒色土器椀の底部である。厚い断面長方形の輪高台が付く。内黒焼成であるが、磨耗が激しく調整等は確認できない。5は土師器壺である。口縁部は受け口状を呈し、口縁端部を摘み上げている。6は土師器の壺である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。7・8は土師器椀の底部である。7は断面長方形、8は断面三角形の輪高台が付く。9は黒色土器椀の底部である。内黒焼成で内面にヘラ磨き調整を施し、輪高台が付く。10～13は須恵器壺蓋である。10は宝珠形のつまみが付く。また内面が磨耗し平滑であるため、転用硯として使用していたと考えられる。14～16は須恵器の壺である。17～19は土師器の壺である。14・15・18・19は底部から体部にかけて外反しつシャープに立ち上がる。17は体部が内湾しつつ立ち上がる。20～24は須恵器壺の口縁部である。22・23はゆるく外反した後、端部をつまみ上げる。25は須恵器壺の肩部である。肩部

に断面三角形の突帯を接合する。22～25は胎土・色調について他の須恵器と明確な差異があり、また表面に自然釉が厚く付着していた。また、小片のため未図化であるが24のような小口縁部と25のような肩部との接合部を確認しており、22～24は須恵器多口瓶の一部である可能性がある。なお、第2テラス出土遺物と併せて後述するが、多口瓶は西播磨産須恵器と考えられる。

盛土中出土の2～4は底部及び高台の形態より10世紀前半～後半の範疇に収まるため、第1テラスの盛土は10世紀後半以降に造営されたと考えられる。また流土中出土の6～21によると、第1テラスは8世紀後半から12世紀にかけて利用されたと考えられる。また、22～25の多口瓶は口縁部及び突帯の形態より9世紀末～10世紀前半の所産と考えられる。

（3）第2～3テラス間斜面（第10図参照）

第2テラスと第3テラスの間の斜面部に設定したトレーナーからは須恵器、土師器、土師質土器、黒色土器などが出土した。遺物はすべて流土中から出土しており、第1・2テラスの遺物が転落したと考えられる。

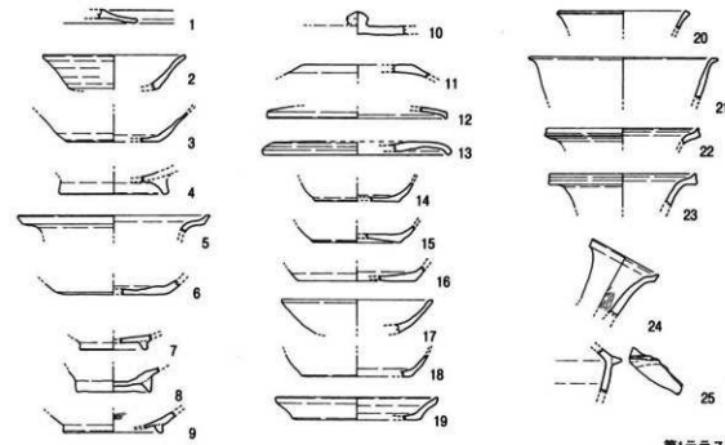
26・27は須恵器壺蓋である。26は円柱形に近い宝珠形のつまみが付く。27は上面が平たく口縁端部はゆるく摘み上げる。28～30は須恵器壺である。底部から体部にかけてやや内湾しつつ立ち上がる。31は西播磨産須恵器広口壺である。内面に自然釉が付着する。32は畿内産の黒色土器椀である。内黒焼成で内面にヘラ磨きを施し、断面三角形の輪高台を貼り付ける。黒色土器A類畿内系III類に分類され、10世紀中葉の所産と考えられる。33は須恵器壺である。底部から体部にかけ直線的に上方へ立ち上がる。34は土師質土器の長胴甕である。外面にはハケ目調整を施し、口縁部はゆるく外反した後わずかに肥厚し、端部は細くつまみ上げている。

遺物の年代は9世紀～11世紀の範疇に収まる。

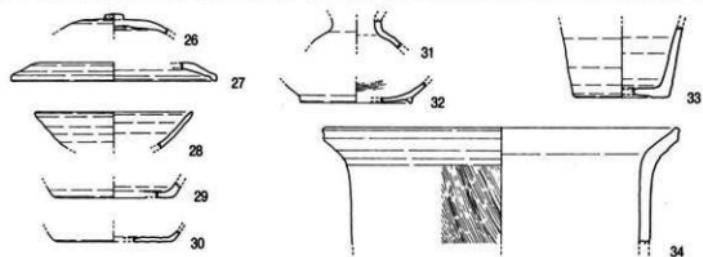
（4）第2テラス出土遺物（第10・11図参照）

第2テラスからは須恵器、土師器、越州窯系青磁などが出土した。出土した遺物のうち流土中出土の遺物は高所の第1テラスより転落したものが混入していると考えられる。35はSK02・SD02・地山上面・盛土上面・流土中・腐植土中より出土したものが接合した。SB01を構成する柱穴SP16の廃絶に伴い掘削されたSK02に埋納された地鎮・鎮壇具と考えられる。36はSB03を構成する柱穴SP12埋土中より出土した。37はSB01に伴う溝SD02埋土中より出土した。38は盛土直上より出土した。39～53は地山・盛土直上～流土中より出土した。

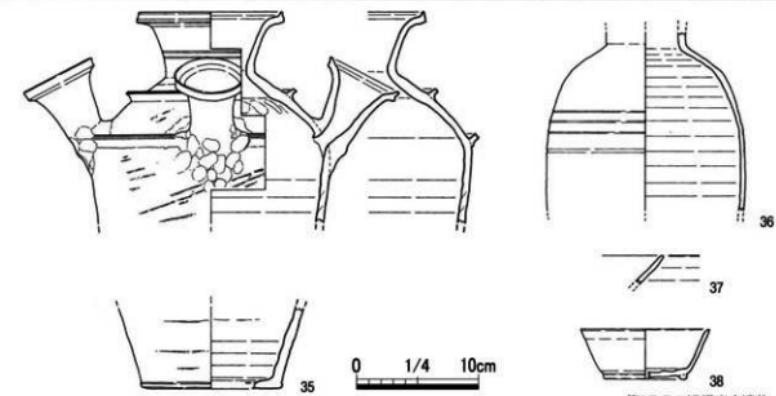
35は須恵器多口瓶である。広口壺の肩部に2条の断面長方形の突帯を内面を抑えながら接合し、その後対角線上に4個の小口縁部を接合している。小口縁部から肩部へ抜ける穴は焼成前に外側から内側へ穿孔している。広口壺の外面は叩きを施した後横ナデを施し、内面には横ナデを施す。口縁部はゆるく外反した後、端部をつまみあげる。土器外面には窯内の降灰による自然釉が全体



第1テラス出土遺物



第2~3テラス間斜面出土遺物



第2テラス遺構出土遺物

第10図 B地区出土遺物実測図 その1

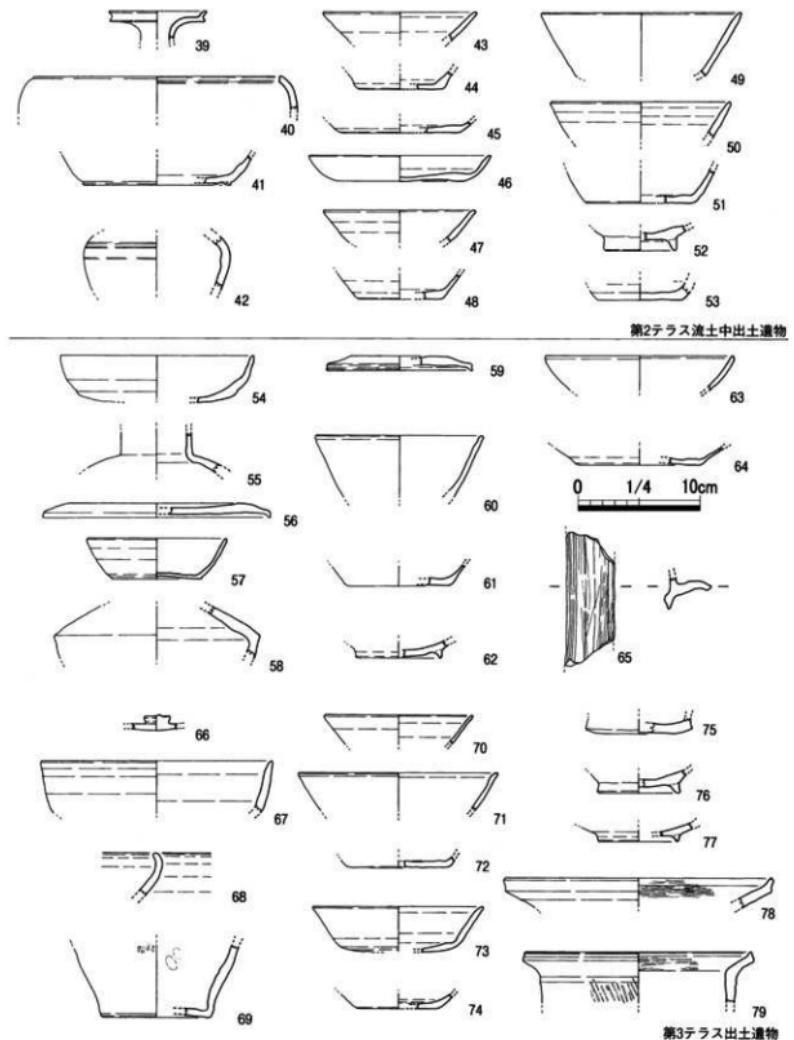
に付着する。自然釉の厚さからは一方向より灰が吹きつけていることが確認できる。須恵器多口瓶の産地・形態については京都国立博物館の尾野善裕氏・奈良文化財研究所の糸淳一郎氏・兵庫県教育委員会の森内秀造氏のご教示を得た。森内氏によると、多口瓶は兵庫県相生市緑ヶ丘古窯址群で出土した須恵器双耳壺に製作技法・器形・胎土が共通しているため、兵庫県相生市周辺の西播磨地方の窯において焼成されたものであると考えられる。しかし、原産地の窯址群において多口瓶の出土は未確認であるため、中寺磨寺跡出土多口瓶は特注品であったと考えられる。多口瓶の年代は緑ヶ丘古窯址群における双耳壺の編年より、9世紀末～10世紀初頭に製造されたものと考えられるが、突帯の形状や口縁端部の形状からはより古相の要素が認められるため、9世紀末に製作されたものと考えられる、とのことであった。36は須恵器壺である。体部は丸みをもって立ち上がり、内面には横ナデ、外面には沈線を施す。37は中国浙江省越州窯産の青磁碗の口縁部である。太宰府市教育委員会の中島恒次郎氏に資料を実見していただいたところ、越州窯系青磁碗の中でも良質の胎土を用い、全面施釉が多く、高台疊付の釉を削り、この部分と内面見込みに目跡が付く精製品の一例（I類）で、平底を呈し体部最下部および底部を回転ヘラ削りし重ね焼きの目跡が体部外面最下部の斜行部と内面にあるもの（I-5類）、もしくはI-5類の底部外面周囲を浅く削って輪状高台とする無文で高台外面斜行部と底部内面に円形・三角形状の目跡を多く持つもの（I-2aウ類）と考えられるとのご教示を得た（分類基準は山本 2000『大宰府条坊跡XV』による）。I-5類・I-2aウ類は9世紀後半から出現し11世紀中葉までが国内出土の最盛期とされる。38は須恵器壺である。体部は直線的に上方に立ち上がり、底部に高台を貼り付ける。時期は8世紀中葉と考えられる。39は西播磨産須恵器広口壺である。口縁部は大きく外反した後、上方に拡張している。40は須恵器鉢である。口縁部内側が窪み、2条の稜を成す。41は須恵器壺である。底部には低い高台を貼り付け、体部は斜め上方へ立ち上がる。42は須恵器壺である。外面に沈線を施し、自然釉が付着する。43・44・49・50は須恵器壺である。45・46は須恵器皿である。47・48は土師器壺である。51は須恵器壺である。平底で体部は丸みを持って立ち上がる。52は土師器碗である。輪高台を貼り付ける。53は土師器壺である。平底で底部はヘラ切りされている。

35よりSB01は9世紀末以降に廃絶されたと考えられる。また36よりSB03は10世紀前半以降に廃絶されたと考えられる。また地山・盛土直上～流土中出土の38～53は8世紀中葉～10世紀後半の範疇に収まる。

（5）第3テラス出土遺物（第11図参照）

第3テラスからは須恵器・土師器・土師質土器・黒色土器などが出土した。54～65は地山・盛土直上より出土した。66～79は流土中より出土した。

54は土師器壺である。底部から体部にかけては緩やかに立ち上がり、やや内湾する。55は須恵器壺である。底部から体部にかけては緩やかに立ち上がり、やや内湾する。



第11図 B地区出土遺物実測図 その2

器壺である。56は須恵器壺蓋である。口縁端部をつまみ上げる。57は須恵器壺である。底部は若干上げ底気味で、体部は若干内湾しつつ立ち上がる。58は須恵器壺である。肩部の稜より上部に

自然釉が付着する。59は須恵器坏蓋である。上部は平らで口縁端部をゆるくつまみ上げる。60・61は須恵器坏である。62・63は黒色土器椀である。共に内黒焼成である。64は土師器坏である。65は土師質土器の移動式の竈の焚口側面部分の破片である。内面が被熱し明赤褐色となる。66は須恵器坏蓋である。宝珠形と円柱形の中間のつまみが付く。67は須恵器坏である。68は須恵器鉢である。口縁部は内湾している。69は須恵器壺の底部である。外面にタタキ、内面に指押さえが見られる。70～72は須恵器の坏である。70は体部が薄く直線的に口縁部へと至る。71は口縁部外面に強いナデを施す。73・74は土師器の坏である。底部から体部にかけては緩やかに立ち上がる。75は円盤状高台を有する土師器坏である。76は輪高台が付く土師器坏である。77は輪高台が付く黒色土器椀である。内黒焼成である。78・79は土師質土器の長胴甕である。口縁部はゆるく外反した後、端部を細くつまみ上げる。口縁部内面にはハケ目調整が見られる。

地山・盛土直上出土の54～65は9世紀末～10世紀前半。流土中出土の66～79は8世紀後半～11世紀の範疇に収まる。

(6) 金属遺物

金属遺物については、香川県歴史博物館のご協力により撮影したX線透過写真を図版12に掲載している。80・83は第1テラス流土中より出土した。81は第1テラス盛土直上より出土した。82は第1テラス盛土中より出土した。84は第2～3テラス間斜面流土中より出土した。

80は円形を呈する6.9cm×6.3cm、厚さ0.2cmの鉄製品である。表面に文様の痕跡は認められなかった。X線写真によると円形の外形線が見て取れる。鏡や寺院・仏像の装飾金具といった円形を呈する金具の一部と考えられる。81は鉄滓である。82は銅滓である。81・82には表面に空気の抜け穴やガラス質の融解物質が観察できる。83は鉄釘である。軸の部分が曲がるもののが完存している。復元される全長は約9.7cm、断面は0.6cm×0.6cmである。84は銅製品の破片である。長辺側は本来の形状を残していると考えられるが、短辺側は両側とも折れて欠損している。現存幅は4.8cm×1.8cmで厚さ0.2cmの薄い板状を呈する。

5. 文献調査

(1) 概要

平成16年度は中寺廃寺跡が所在する旧村である造田村の庄屋文書『西村家文書』中の「日帳」の調査を行った。その結果、天保6年(1835)2月の条において、造田庄村屋と高松藩の役人の命を受けた鶴足郡の大庄屋との間で行われた文書のやり取りの中で、「中寺」という記載を確認した。文書の内容は大庄屋が出した藩主が鷹狩の際に通行する道沿いに所在する名所・旧跡の照会と、

造田庄村屋からのそれに対する回答である。内容から當時中寺廃寺跡はすでに廃絶していたが、通行する道から2町（218m）の距離に所在すると認識されていたことを確認した。

平成17年度は近世段階における中寺廃寺跡周辺の古道の復元や当時の人々の中寺廃寺跡に対する認識の解明を目的に、引き続き『西村家文書』の調査を実施した。以下、文書中の殿様鷹野関連史料のうち、前回未報告箇所について調査整備委員会の木原委員が解説した訣文と読み下し文、及び造田村の庄屋が提出した藩主が鷹狩を行う際に通行する道筋の絵図を掲載した。また、今回報告の絵図に加え、前年度報告した柞野谷の絵図について、巻頭写真図版にカラー写真を掲載している。

（2）『西村家文書』「日帳」所収 殿様鷹野関連史料

①②③は造田庄村屋が大庄屋らに古道の詳細について書き送ったものである。④は造田庄村屋が山方役所の役人に対して提出した藩有林の中に道をつけるための申請書である。⑤は山方役所の役人から造田庄村屋に書き送った出頭願いで、⑥はその返答である。⑦は大庄屋が造田庄村屋に書き送った問い合わせで、⑧はその回答である。以下、史料の要約を示す。

①・②麓からの道は通行できる状態にあるが、阿波との境の峰筋を通るためにには柞野新御林の中の木を伐採し新道をつける必要がある。しかし現在雪が3尺（約1m）あるため、現地の様子がわからない。③先日は塩入村（仲南町塩入）から大川までの距離は50町（約5.5km）と伝えたが、山道のため70町（約7.6km）になる。また馬には少々荷物を積んでも問題なく通行できると伝えられたが、これは阿波の馬の場合であり、讃岐の馬ではあまり荷物は積めない。④殿様が通行されるため、新御林の中に道を敷設したい。その際支障となる木の伐採が必要な場所が多くある。⑤道をつける際の支障木について詳細を理解している組頭を、飛脚が付き次第山方役所へ出頭させなさい。⑥早速組頭を出頭させる。⑦先年長曾我部の兵火にあった中寺は何免に存するのか。⑧中寺は大川社に關係した坊の事で、阿波との境界である笹ヶ多尾の少し下にある。四方を山に囲まれており何免とも判断しがたいが、樫地免の付近なので樫地免に属すとしてよいと思われる。

（3）『西村家文書』「絵図（『殿様御鷹野被仰出候ニ付峯筋御往来道法方角絵図指出之控』）」

造田庄村屋が大庄屋に提出した藩主が鷹狩を行う際に通行する道筋を示した絵図の控で、大川社から琴南町・仲南町・徳島県との境である笹ヶ多尾（笹の多尾）までの讃岐山脈上の道が書き記されている（第1図参照）。絵図中には古道と新道が平行して描かれ、張り紙には「笹ヶ多尾から大川社への道2町（約218m）は阿波、そこから1町（約109m）は松平藩領、そこから11町（約1,200m）は阿波」、「道は狭い道であったが今回新道を願い申し出た」などの記載がある。

西村家文書「日帳」所収、殿様鷹野関係史料

①
一筆啓上仕候、然ハ御通筋之道筋者樹木生茂り、御道具障りハ無御座候
一峯筋御通行ニ相成候得ハ、柞野新御林之内、右之障り木可有御座と奉存候ニ付、跡々委く可申上候、先右之趣申上度如斯ニ御座候、以上

二月三日

宮井清七様

西村市太夫

②
一筆啓上仕候、殿様御通筋ニ相成ニ而も、籠の道筋ニ者樹木生茂り、御道具障りハ無御座候一峯筋阿州御堺目御通行ニ相成候得者、柞野新御林之内、諸木伐払不申候ハ而ハ、新道付不申義ニ御座候、尤未雪三尺位も積居申候ニ付、様子も委く難相別義ニ御座候、先右之段申上度、如斯ニ御座候、以上

二月四日

杉上加左衛門様

徳永二郎八郎様

西村市太夫

③
一郡方へ右役所へ申出之通、同日申出仕候、尤追啓左之通

宮井清七様

十河龟五郎様

尚々、本文之通役所へ今日申出仕候、併御境松木之大木も有之、何様六ヶ敷新道ニ而、大ニ心配仕居申候、委細ハ右役所へ罷出候組頭指出申候間、御聞被成可被下候、山方役所へも申出仕候、且又、昨日塙入村々大川迄道法、五拾丁位と申義申上候得共、山道之事故七拾丁ニモ積有之様相聞ヘ申候、何様雪深事ニ而、委細相別不申義ニ御座候、井ニ馬少々之荷物ハ不苦様申上候得共、此義も阿州馬ハ隨分六斗位付越候得共、讃州之馬ニ而ハ無覚束様ニ相聞ヘ申候間、右様兩段ニ御開置被成可被下候、右為念申上度、如斯ニ御座候、以上

二月四日

④
一筆啓上仕候、然ハ殿様御順在、峯筋御通行被為遊候御様子ニ付、御道筋取繕候様之見積ニ罷越候所、柞野新御林之内へ新道付不申候而ハ、阿州之分へ相懸り、甚心配仕居申候、又新道ニ付申候時ハ、御林諸木伐払候場所多く有之、是又心配仕居申候間、何様早々御見分之上、宣御取計被成可被下候、尤雪三尺位も積居申候ニ付、篤様子も難相別義ニ御座候、先右之段申出度、如斯ニ御座候、以上

二月四日

庄屋

西村市太夫

安富弥右衛門様

森 太右衛門様

尚々、御堺松等段々伐払候様ニ相見ヘ申候間、御何様御見分ニ指出可被下候

⑤

飛脚ヲ以申進候、然ハ殿様御順二付、御通筋御林之諸木障リ木之義ニ付、□□致御用有之候間、能相心得居申候組頭老人、此飛脚着次第御役所へ御指出可被成候、為其申進候、以上

一月五日

森 太右衛門
安富弥右衛門

西村市太夫様

⑥

御状拝見仕候、然組頭之儀御誰之様參立仕候、跡々早々指出可申候、右申答迄如斯御座候、以

上

一月六日

安富弥右衛門様
森 太右衛門様

西村市太夫

⑦

急申達候、然ハ先達而御申出在之候長曾我部時代、兵火ニ逢候其村ニ在之中寺与申ハ、何免之内ニ在之候中寺ニ候哉、否此狀次第急御申出可被成候、甚指急申候、以上

九月六日

十河亀五郎
西村市太夫様

尚々、飛脚ニ而得御意□ニ而御申出可被成候、以上

御飛札拝見仕候、然ハ当村中寺、先年長曾我部兵火ニ燒失仕候寺跡、何免場ニ有之候哉与、達々被仰聞候趣承知仕候、則左ニ申上候
一中寺跡

但、大川社坊之由ニ而、阿州堺箇多尾之少し下タニ而、東西南北共大山統之中故、何免とも儘ニ難申上候、先櫻地免 手近之場所ニ付、櫻地免与申候而も、宜御座候哉与奉存候
右之通ニ御座候間、宜御申出可仕候、以上

九月七日

十河亀五郎様

西村市太夫

①

一筆啓上仕り候、然ハ殿様御順在、峯筋御通行遊ばせられ候御様子ニ付き、御道筋取り繕ろい候
一峯筋御通行ニ相成り候得ハ、柞野新御林の内ニ、右の障り木御座有るべくと存じ奉り候ニ付、
跡より委く申し上げべく候、先ず右の趣申し上げ度、斯くの如くニ御座候、以上

二月三日

宮井清七様

西村市太夫

②
一筆啓上仕り候、殿様御通筋ニ相成リニテモ、麓の道筋ニは樹木生茂り、御道具障リハ御座無く候
一峯筋阿州御堺目御通行ニ相成り候得は、柞野新御林之内、諸木伐り払い申さず候ハてハ、新道
付き申さざる義ニ御座候、尤も未だ雪三尺位も積もり居り申し候ニ付、様子も委く相別り難き義
ニ御座候、先ず右の段申上げ度、斯くの如くニ御座候、以上

二月四日

西村市太夫

杉上加左衛門様

徳永二郎八郎様

③
一郡方へ右役所へ申し出での通り、同日申し出で仕り候、尤も追啓左の通り

宮井清七様

十河龟五郎様

尚々、本文の通り役所へ今日申し出で仕り候、併しながら御境松木の大木もこれ有り、何様六ヶ
敷き新道ニテ、大ニ心配仕り居り申し候、委細ハ右役所へ罷り出で候組頭指し出し申し候間、御
聞き成られ下さるべく候、山方役所へも申し出で仕り候、且つ又、昨日塩入村より大川迄道法、
五拾丁位と申す義申し上げ候得共、山道の事故七拾丁ニも積もりこれ有る様相聞へ申し候、何様
雪深き事ニテ、委細相別申さざる義ニ御座候、并びニ馬少々の荷物ハ苦しからざる様申し上げ候
得共、此の義も阿州馬ハ隨分六斗位付け越し候得共、讃州の馬ニハ覚束無き様ニ相聞へ申し候
間、右様両段ニ御聞き置き成られ下さるべく候、右念の為申し上げ度、斯くの如くニ御座候、以
上

二月四日

④

一筆啓上仕り候、然ハ殿様御順在、峯筋御通行遊ばせられ候御様子ニ付き、御道筋取り繕ろい候
様の見積もりニ罷り越し候所、柞野新御林の内へ新道付け申さず候てハ、阿州之分へ相懸り、甚
はだ心配仕り居り申し候、又新道ニ付き申し候時ハ、御林諸木伐り払い候場所多くこれ有り、是
れ又心配仕り居り申し候間、何様早々御見分の上、宜しく御取り計らい成され下さるべく候、尤
も雪三尺位も積もり居り申し候ニ付、篤と様子も相別り難き義ニ御座候、先ず右の段申し出で
度、斯くの如くニ御座候、以上

一月四日

庄屋

西村市太夫

安富弥右衛門様
森 太右衛門様

尚々、御堺松等段々伐り払い払い候様ニ相見へ申し候間、何様御見分ニ指し出し下さるべく候

⑤

飛脚ヲ以て申し進め候、然ハ殿様御順^(二)二付き、御通筋御林の諸木障リ木の義ニ付キ、□□致す御用これ有り候間、能よく相心得居り申し候組頭老人、此の飛脚着き次第、御役所へ御指し出し成らるべく候、其の為申し進め候、以上

一月五日

森 太右衛門
安富弥右衛門

西村市太夫様

⑥

御状拝見仕り候、然組頭の儀御誰之様参り立て仕り候、跡より早々指し出し申すべく候、右、申し答え迄斯くの如く御座候、以上

一月六日

安富弥右衛門様
森 太右衛門様

西村市太夫

⑦

急ぎ申し達し候、然れハ先達て御申し出でこれ在り候長曾我部時代、兵火ニ逢い候其の村ニこれ在る中寺と申すハ、何免の内ニこれ在り候中寺ニ候哉、否此の状着き次第急ぎ御申し出で成らるべく候、甚だ指し急ぎ申し候、以上

九月六日

西村市太夫様

十河亀五郎

尚々、飛脚ニて御意を得□ニテ、御申し出で成らるべく候、以上

⑧

御飛札拝見仕り候、然れハ当村中寺、先年長曾我部兵火ニ焼失仕り候寺跡、何免場ニこれ有り候哉と、達々仰せ聞され候趣承知仕り候、則ち左ニ申し上げ候

一中寺跡

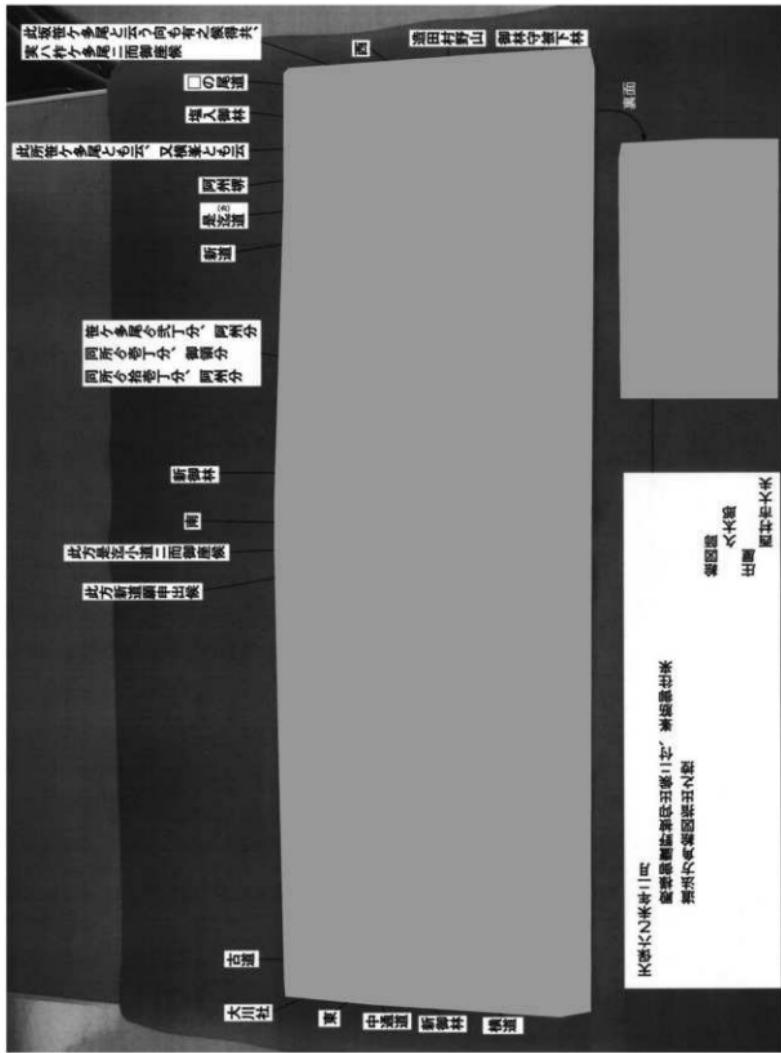
但し、大川社坊の由ニテ、阿州堺ヶ多尾の少下タニテ、東西南北共大山続きの中故、何免とも儲ニ申し上げ難く候、先櫻地免より手近の場所ニ付き、櫻地面と申し候ても、宜しく御座候哉と存じ奉り候

右の通りニ御座候間、宜しく御申し出で仕るべく候、以上

九月七日

十河亀五郎様

西村市太夫



『西村家文書』「絵図(『殿様御鷹野被仰出候ニ付峯筋御往来道法方角絵図指出之控』)」

6. まとめ

(1) B地区所在建物の検討

平成17年度中寺庵寺跡発掘調査成果をもとに、各テラスに所在した建物の検討を行う。

第1テラスは、礎石配列及び土壇の形状から、桁行5間×梁行3間の礎石建物が所在したと考えられる。中央の4個の礎石を建物の礎石に含め、南向きの桁行3間×梁行2間の礼堂と仏堂が2棟併設されていた可能性も考えられるが、その場合①建物正面となる南側の第2・3テラスに、後述するように僧房が存在する（僧房は仏堂正面を避けて建てられたと考えられるため）こと、②東側の大川山方向の広場と階段の存在により建物正面が東側と考えられること、③狭い尾根に直交して2棟併設されることは考えにくくことより、第1テラスには桁行5間×梁行3間の礎石建物が存在したと考えられる。しかし、桁行5間×梁行3間の仏堂の事例（奈良県長福寺本堂など）が全国的に非常に少ないため、今後検討が必要である。

礎石建物には石列を巡らせた土壇、石の階段、広場が付設する。建物中央の1間×1間の礎石は須弥壇を支えた礎石と考えられるため、礎石建物は仏堂であったと考えられる。建物の方位が東を向くため、東を向く仏像である阿弥陀仏（西方淨土より訪れるため）が建物中央部の須弥壇に安置されていた可能性がある。また大川山の山頂を向き、広場が造成されていることから、古くから山岳信仰の対象となっていた大川山を意識した建物でもあったと考えられる。建物内の空間は仏像の周りをめぐりながら念佛を唱える常行^{じょうぎょう}が行われていたと考えられる。

出土遺物から10世紀後半以降に土壇が造成され、その後礎石建物が造成されたことが確認できる。しかし流土中出土遺物からは8世紀後半～12世紀まで第1テラスが利用されたと考えられるため、土壇・礎石の下位に先行する遺構が存在する可能性がある。

第2テラスは調理具・供膳具などの日常食器類が出土していることから、僧侶の日常生活を営んだ僧房が存在したと考えられる。掘立柱建物跡の規模からはSB01→SB02→SB03へと徐々に拡張が行われつつ建て替えが行われたことがわかる。また、SK02から出土した多口瓶からは、建物廃絶に地鎮・鎮壇行為が行われたと考えられる。柱穴式出土遺物から想定される建物の廃絶時期はSB01が9世紀末、SB03が10世紀前半である。流土中出土遺物の時代幅を合わせて考えると、8世紀中葉から11世紀の間に第2テラス周辺が利用されたと考えられる。

第3テラスは検出した柱穴の埋土・間隔が第2テラスSB03に近いため、第2テラスにSB03が造営された段階で第3テラスに建物が造営された可能性が考えられる。また流土中の出土遺物の時期からは8世紀後半～11世紀に第3テラス周辺が利用されたと考えられる。

（2）中寺廃寺跡出土多口瓶について

中寺廃寺跡からは多口瓶が第1テラスより破片数点、第2テラスより1個体出土している。第2テラス出土多口瓶は埋納された状態で出土しているものの全体が完存しない。寺院において使用されていた多口瓶が破損した際に地鎮・鎮壇具として再利用された可能性が考えられる。また、原産地では出土が確認されていない西播磨産の多口瓶を有することから、中寺の造営に関わった組織が西播磨の窯へ多口瓶製造の特別注文を出していたと考えられる。

中寺廃寺跡以外の中国・四国地方の遺跡より出土した多口瓶は、兵庫県播磨国分寺より1点、鳥取県大御堂廃寺より1点、香川県高松市千間堂跡より4点、香川県丸亀市法興寺より1点確認されている。また、岡山県真庭市下市瀬遺跡では口が大小併せて16個付いた多口瓶が確認されている。いずれも寺院関係の遺跡からの出土であり、また須恵器窯址での出土は確認されていないため、多口瓶は寺院関係で用いられた特殊な仏具であったと考えられる。県内からは高松市千間堂跡より県内の窯址で製造された多口瓶が出土している。

遠方の窯産の特注品が中寺廃寺跡から出土した背景については、今後周辺の出土事例や各地の須恵器窯の供給範囲についての検討を行った上で解明して行きたい。また、密教修法に関する文献中には密教僧が修法の際に用いる器の色に対するこだわりが表現された文章（文久5年（1117）に勝覚僧正が請雨經法を勤修した際の記録『文久五年祈雨日記』中の記載に次の記載がある。「抑青瓷器等不足。巨多以白瓷器令塗緑青何事候哉。毎事早々可令計申給者。依院御氣色。執達如件。」。内容は雨乞いの修法を行う際に必要な「青瓷」、つまり緑釉陶器が不足したので、白い器「白瓷」に緑釉を塗って代用したとある。）が確認されている。密教修法の中で「白い器」を使用する必要がある際に、表面が白い西播磨地方の須恵器窯に対して、寺院で使う特殊な仏具を注文した可能性も考えられるため、今後密教修法の教義内容からも検討を進めたい。

（3）中寺廃寺跡の全体像について

以上、既存調査成果を元に中寺廃寺跡の全体の変遷について画期ごとに整理したい。

まず第1の画期として8世紀中葉の段階でB地区第2テラスにおいて山中での活動が始まり、その後9世紀までSB01・SB02と建て替えを行ないつつ僧房が造営される。当時国府や大規模な港などにしか持ち込まれていない越州窯系青磁碗の精製品や、遠方の西播磨で特注されたと考えられる多口瓶を有するなど、山中への寺院展開の背後には大きな勢力が関わっていたと考えられる。また、流土中出土遺物の時期からはB地区第1・3テラスにも何らかの施設が営まれていたと考えられる。

第2の画期として10世紀前半になるとA地区へ塔と仏堂が平面的な配置計画に基づき造営される、B地区においても第1テラスに土壇と広場を伴なう規模な仏堂が造営され、第2テラス

SB03・第3テラス SB04といった大規模な僧房が造営される。この頃が中寺の最盛期であったと考えられる。

第3の画期として12世紀に入ると各地区に展開していた伽藍は衰退し、建物の廃棄や移動が行われたと考えられる。

県内に所在する高松市千間堂跡においては9世紀後半から遺物が認められ、10世紀前半に仏堂と考えられる礎石建物が造営され、11世紀末～12世紀初頭に平野から遠い北嶺から平野に近い南嶺へと寺が移動しており、変遷の時期は中寺廃寺跡とほぼ同様である。また、仲南町尾ノ背廃寺跡においては12世紀から遺物が確認できるため、第3の画期の段階で寺院が建立されたものと考えられる。県内の山岳寺院の展開には共通する要素が認められる。

以上、調査成果を元に中寺廃寺跡の性格・変遷を想定したが、今年度調査において資料が増加したものの未だ不明瞭な点が多く、一つの可能性を示したに過ぎない。中寺廃寺跡は山中に立地するため、各時期の伽藍の展開が後世の開発を免れ良好な状態で残存している。そのため、調査の進展により中寺廃寺跡が展開した課程が明らかになれば、県内に展開する仲南町尾ノ背廃寺や高松市千間堂跡等、他の山岳寺院の展開を考える好例となると考えられる。今後も近隣に展開する遺構の発掘調査や文献調査による古道・地名の復元等、様々な視点から調査を行い、成果の批判・検討を行ながら中寺廃寺跡の歴史的な意義付けを行っていきたい。

参考文献

- 安藤文良 1987 「古瓦」『香川県史 13 資料編 考古』香川県
- 伊沢肇一他 1980 『尾ノ背廬寺跡発掘調査概要（I）』仲南町教育委員会
- 上原真人他 2002 『佛教藝術 265 特集山岳寺院の考古学的調査 西日本編』佛教藝術學會
- 進藤政量 1799 「讃岐廻遊記」（1943『香川叢書』第3巻所収）
- 田仲満雄 1974 「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 3』
- 富島義幸 2005 「九体阿弥陀堂と常行堂—尊勝寺阿弥陀堂の復元と位置づけをめぐって—」『佛教藝術 283』毎日新聞社
- 中西昇 1988 『県道府中・琴南線改良工事に伴う備中寺遺跡発掘調査報告書一付・中寺廬寺確認調査概報－』琴南町教育委員会
- 森内秀造 1995 『兵庫県文化財調査報告 第139 冊 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告X III 相生市・緑ヶ丘窯址群II』兵庫県教育委員会
- 森下英治 「法勲寺」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会
- 山岸常人 2000 『中世寺院社会と仏堂』塙書房
- 山元敏裕 2003 『史跡名勝天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書 I 史跡名勝天然記念物屋島』高松市教育委員会
- 山本信夫 2000 『陶磁器分類』『大宰府条坊跡X V』太宰府市教育委員会
- 1973 『重要文化財 12 建造物 I』文部省文化庁
- 1976 『綾歌町史』綾歌町
- 1976 『仏教考古学講座 第1巻』雄山閣
- 1986 『琴南町誌』琴南町
- 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 2001 『史跡大御堂廬寺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 2002 『古代寺院から見た播磨 第3回播磨考古学研究集会資料集』第3回播磨考古学研究集会実行委員会

第2表 中寺庫寺跡出土遺物觀察表(1) 十器

番号	通称・器種	出土地點	口径(cm)	法面(cm)	口径	底面	側面	胎・土	色調・外観	
									輪郭	輪郭
43	須弥壇・杯	第2テラス、洗石下位	12.8	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
44	須弥壇・杯	第3テラス、洗石上位	10.0	6.0	8.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
45	須弥壇・杯	第3テラス、洗石上位	15.0	13.0	2.1	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
46	須弥壇・杯	第2テラス、洗石下位	12.5	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
47	七宝焼・杯	第2テラス、洗石下位	12.8	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
48	七宝焼・杯	第2テラス、洗石下位	12.8	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
49	須弥壇・杯	第3テラス、洗石上位	17.8	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
50	須弥壇・杯	第3テラス、洗石上位	14.8	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
51	須弥壇・杯	第3テラス、洗石上位	9.2	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
52	土燒器・碗	第3テラス、洗石上位	6.0	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
53	土燒器・盆	第3テラス、洗石上位	7.0	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
54	土燒器・杯	第3テラス、洗石上位	15.0	7.0	10.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
55	須弥壇・蓋	第3テラス、洗石上位	18.7	7.3	4.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
56	須弥壇・蓋	第3テラス、洗石上位	11.6	7.3	4.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
57	須弥壇・蓋	地盤上	11.6	7.3	3.3	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
58	須弥壇・蓋	地盤上	11.6	7.3	4.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
59	須弥壇・蓋	地盤上	12.2	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
60	須弥壇・蓋	地盤上	14.0	8.4	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
61	土燒器・杯	地盤上	12.2	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
62	土燒器・杯	地盤上	7.1	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
63	黑色土燒器	地盤上	15.7	10.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
64	土燒器・杯	地盤上	14.0	8.4	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
65	土燒器・杯	地盤上	15.7	10.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
66	須弥壇・蓋	地盤上	19.2	10.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
67	須弥壇・蓋	地盤上	19.2	10.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
68	須弥壇・蓋	地盤上	9.1	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
69	須弥壇・蓋	地盤上	12.2	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
70	須弥壇・杯	地盤上	16.5	8.4cm	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
71	須弥壇・杯	地盤上	14.1	7.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
72	須弥壇・杯	地盤上	14.1	7.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
73	土燒器・杯	地盤上	14.1	7.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
74	須弥壇・杯	洗石中	8.8	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
75	土燒器・杯	洗石中	8.8	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
76	土燒器・杯	洗石中	6.9	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
77	黑色土燒器	洗石中	6.7	6.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
78	土燒器・盆・長颈瓶	第3テラス、洗石中	22.6	7.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/
79	土燒器・盆・長颈瓶	第3テラス、洗石下位	18.6	7.0	6.0	0.6mm以下	口縁部のみ 輪郭部のみ	白色	白色N5/	白色N5/

第3表 中寺庵寺跡出土遺物観察表(2) 金属遺物

番号	通称・器種	出土地點	法面(cm)		側面	材質	X線写真検査所見		色調・表面	
			平行部	最大幅			斜面	斜面	斜面	斜面
80	金飾品	第3テラス、洗石上	6.9	6.3	0.2	逐段柱	斜面	斜面	白色N5/	白色N5/
81	金飾品	第3テラス、洗石上	4.6	4.2	0.2	逐段柱	斜面	斜面	白色N5/	白色N5/
82	金飾品	第3テラス、洗石上	1.5	1.0	0.7	逐段柱	斜面	斜面	白色N5/	白色N5/
83	和釘	第3テラス、洗石下位	7.0	0.6	0.6	充てん	斜面	斜面	白色N5/	白色N5/
84	金飾品	第3テラス・焼付鉢・洗土中	4.8	1.8	0.2	一般	斜面	斜面	白色	白色

※色調は、墨水画と实物とで多少の誤差があるが、それはそれでいい。ただし、内部構造は必ずしも一致しない。